

第42回名古屋芸術大学 卒業制作展

2015年3月3日[火] - 8日[日]
愛知県美術館ギャラリー [愛知芸術文化センター8階]
10:00-18:00 (金曜は20:00、最終日は17:00まで)
【美術学部】美術学科(日本画・洋画・美術文化)
【デザイン学部】デザイン学科

名古屋市民ギャラリー矢田
9:30-19:00 (最終日は17:00まで)

【美術学部】美術学科(彫塑・立体造形・ガラス・陶芸・アートクリエイター・版画)
【デザイン学部】デザイン学科

名古屋芸術大学西キャンパス [アート&デザインセンター]
10:00-18:00

【美術学部】美術学科(洋画)
【デザイン学部】デザイン学科



第42回名古屋芸術大学 卒業制作展記念講演会
ナガオカケンメイ

「デザインしないデザイン -ナガオカケンメイの一生-」

2015年3月7日[土] 14:00-16:00
アートスペースA (愛知芸術文化センター12階)
入場無料:要申込※申込は終了しました

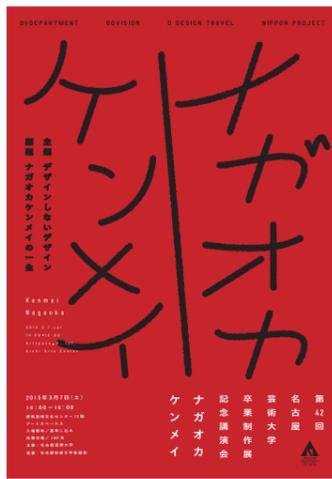
「日韓アートマネジメントシンポジウム」

2015年3月30日[月] 9:30-16:30
名古屋ガーデンパレス2階 翼の間
参加費無料・申込不要



昨年のシンポジウムの様子

韓国・釜山にある新羅大学と名古屋芸術大学は2013年5月に第1回日韓アートマネジメントシンポジウムを新羅大学にて実施しました。それ以来、互いの都市で開催されるあいちトリエンナーレと釜山ビエンナーレを互いに訪問してフィールドワークを行うなどして、交流を継続しています。第2回目となる今回のシンポジウムでは、それら国際芸術祭の事例も踏まえつつ、両国のアートマネジメント研究の最前線を議論します。お問合せ先 日韓アートマネジメントシンポジウム実行委員会事務局 (名古屋芸術大学改革推進室) tel 0568-24-0315



チラシデザイン:白澤真生

編集後記

「新しい」ことってなんだろうな、と編集者ずつと考えていました。今注目されている新しい事は、今現在第一線で活躍している人々が導き出した過去から今への返答であり、学生の皆さんが社会にでていく頃にはきっと別の「新しい」が出てきているのでしょう。正直、次の「新しい」が何なのか、私にはさっぱり見当もつきません。ただ、目の前のことを見つめて丁寧に返答を繰り返すことで、見えてくるものなんだろうな、と思っています。

惣城友美(アート&デザインセンター)



最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄大塚山線(地下鉄有楽線乗り入れ)徳重-名古屋芸術大学西キャンパス西へ約1,000m徒歩15分
※急行一本急電車の場合は西春駅で普通電車で乗り換えか下車してください
中部国際空港からも名鉄大塚山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分



大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。



NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS

2015. Vol. 42

愛知の Re...

Our「Re...」-Let's think twice-

「Re...」



昭和40年代の名古屋駅周辺。画面中央ロータリーに今は名城公園に移設された青年の像が見える(画像提供:名古屋市広報課)

リユース、リノベーション、リデザイン、リサイクル、リプロダクト... デザインは「つくる」ことから今では「素材」をどのように生かすか、再編集、再発見が活発になってきています。しかし日本では伊勢神宮の遷宮にみるように、再生しながら長い時を受け継いでゆくものが多く、「RE...」という精神は古来より私たちに息づいているのではないのでしょうか。愛知県は古くから産業が発達し、世界有数の企業が連なる都市でもあります。そんなこの地元に息づく産業、デザイン、そしてアートの未来を「RE...」というキーワードから考えてみませんか。

健康な精神に
健康なデザインが
やどる

D&DEPARTMENTプロデュース60VISION(ロクマルビジョン)で2003-2011年まで復刻販売されていた、ノリタケ60の業務用メラミンテーブルウェア。(アデアガラスと共に和田教授私物)



60年代に製造されていた石塚硝子のアデアガラスのシリーズ。貴重な当時のブランドシール付き。

未来への再生としての「RE...」を考える時、デザイン活動家のナガオカケンメイさんのことが思い出される。その強烈な印象は「学生とデザイナーと一緒にゴミを増やすような作品をこれ以上作るな」との発言だった。それはいまから20年程前、東京デザイナーズウィークのイベントに対して、デザインニュースに掲載された記事だった。まさにデザイナー全員を敵に回すようなその言葉は、つまり、「考えて考えて、これなら世の中に出しても良いと思うまで作品を公表してはいけない」という指摘だったのだ。

1月後半の冬晴れの中、代官山のナガオカさんのオフィスへお伺いする機会を得た。彼の主宰するD&DEPARTMENTでは、愛知の60年代のプロダクト製品をRe Product(再生産)している。その理由を問うと、「世の中には物があふれていて、その中で本当に良い物を探していたら、石塚ガラス、ノリタケ、刈谷木工の製品がすばらしくて、調べたら60年代に生産されていたことが解り、たまたまそれが愛知の製品だった」とのこと。まさに「愛知の「RE...」には、健康で循環するデザインの力が宿っている。

これからのデザイナーの役割がますます複雑になる中、社会へ、産業へ、地域へ、世の中を良い方向へ導けるのは「デザイナーの力」がとても重要だ。ナガオカさんと、愛知のこと、デザインのこと、アートのことを語り合ってみた。

和田義行 デザイン学部教授

ノリタケの森 赤レンガ建築(旧製土工場) 経済産業省が近代化産業遺産群に認定



Open 12:15-18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館
入場無料 どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

- 4/ 1 日 → 4/15 日 2014年度 デザイン学部レビュー選抜展 ※4/2-7は休館
5/15 日 → 5/20 日 書道アート展(仮称)
5/22 日 → 5/27 日 名古屋芸術大学 美術・デザイン学部OB・OG展2015
5/29 日 → 6/ 3 日 創作折紙展
5/29 日 → 6/ 3 日 THE MEDAL COMPLEX
6/ 5 日 → 6/10 日 『AFTER DENMARK 2015;中田由絵×長谷川直美』展
6/12 日 → 6/17 日 名古屋芸術大学教員展
6/19 日 → 6/24 日 peace nine 2015
6/19 日 → 6/24 日 アートクリエイターコース・コレクション展(仮称)
6/26 日 → 7/ 1 日 名古屋芸術大学大学院 洋画制作2015

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 TEL [0568]24-0325 FAX [0568]24-2897

Ble Vol.42
発行日 2015年3月3日
編集 高橋綾子(美術学部美術文化コース)/惣城友美(アート&デザインセンター)
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 E-mail adc@nuu.ac.jp URL http://www.nuu.ac.jp
2015 Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts デザイン/印刷 サンメッセ株式会社

# ナガオカケンメイさんに 伺った、

## ロングライフデザイン

ずっとデザイナーやってきて、もう作らなくていいだろうと。日本は消費大国と言われるようにリサイクルショップが世界で見てもかなり多い。それはエコなんかじゃなくて消費をしやすい仕組みとしてあると思うんですけど、リサイクルショップに行くと、今コマーシャルを打てるような商品が、もう既に並んでいる。その消費のサイクルに恐怖感を感じた。デザイナーはこのサイクルを促す職業であってはいけないなって。

ものを作らない事もデザイナーが提案しないといけない。それで既に世の中に生まれてきたものを最初に見直そうと。そして、どうせ作るならちゃんと長く使えるようなものを生み出すのがデザイナーっていう職能の仕事にした方がいいんじゃないかって。

愛知の産業、  
デザイン  
デザインに對して、愛知にあまり良い印象がなくて(笑)。もちろん愛知育ちだからこそ言うんですけど。産地としてというよりも産業として、技術もすばらしくあるし、ノウハウもあるから、他の産地が作れないあらゆるものを作れちゃう。だから愛知らしさとかより、どんな世界的な方向性とか技術とかで行っちゃうんでしょうね。そこがすごくもったいない。個人的には名古屋駅とか栄よりも、ちよっと外れた岡崎とか春日井や、知多半島、渥美半島とかの文化の方が好きですね。あっちの方に愛知県のデザインの最終的なよりどころがあると思うんです。時代が変わって「愛知らしさ」「土地らしさを打ち出しましょう」と言った時に、これからの課題なのかもしれない。



## 愛知のこと、

名古屋の文化的な動きについて  
なんていうか困ってない。若者が草の根的に映画を作ろうとか、喫茶店文化はあってもカフェ文化のように若者達が集まってコミュニティ的な何かをやろうとする動きはない。そういうところが不満ではあって、愛知県育ちとしてはなんとかしたい。日本を代表する企業がいっぱいあるから財力も発言力もある。そういう意味では個としての民間のエネルギーが余り聞かえて来ないね。

## アートのこと、ICA Nagoya のこと (アルバイトをしていたとお聞きして)

僕は南條史生さんのアシストで設営のお手伝いをしていました。ポルトンスキーの指示に従って 1000 箱くらい届いた古着を敷き詰めたり、マリオ・メルツの指示通りにガラスをこう割って散らばせるとか…。

グラフィックは矢萩喜徳郎さんでディレクターは南條さんで、今だったら考えられないくらいの特典です。名古屋にいた僕らの世代は、とにかくここに皆集まった。でもオープニングには4~50人しか集まらなくて、なんて贅沢というか知られていないというかな。それでも世界一級品の展覧会をアーティストを呼んでやっていましたよ。これは愛知県の強烈な思い出です。

ここは工場跡の気配も残しながら派手な看板もなく。名古屋ってこう、立派なものをガーンって建てちゃうような傾向があるんじゃないですか。それからすると相当かっこ良かったです。誰でも分かるような事じゃない文化的なメッセージを貫こうとする意識や、工業地帯でああいう事をやる時の作法っていうのかな。あまり作り込まずにあるものをつかきよく見せて行く。そのかっこ良く見せて行くセンスはほんとに影響をうけましたね。



## デザインのこと、 名古屋の食べ物

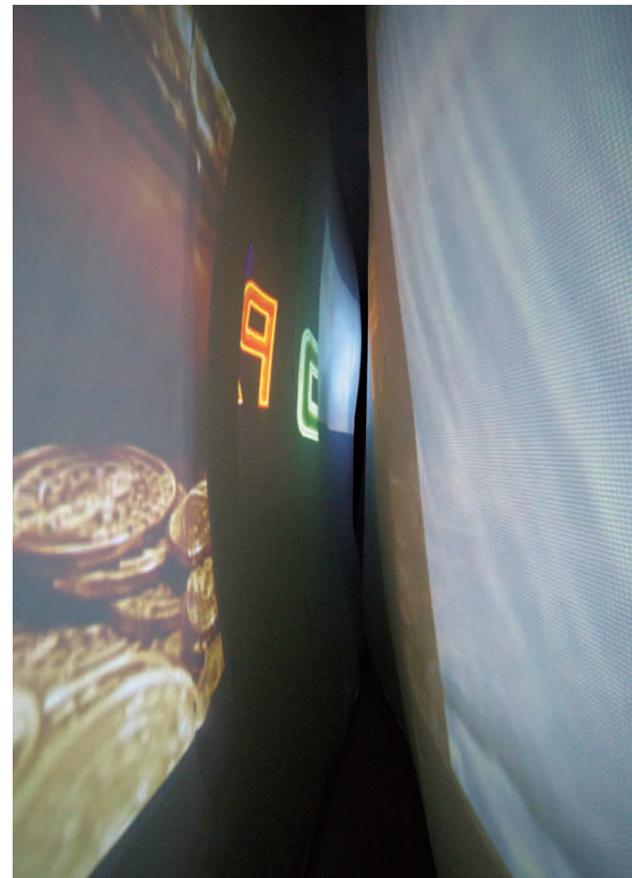
相当好きです。味噌煮込みうどんはよく食べるし、味仙にも一ヶ月に一回は何かしら行ってます。わざわざ名古屋の駅で途中下車して、新幹線ホームできしめん食べて。あと味噌カツ弁当で名駅でも売ってるんだけどベッタベタに赤みそが塗ってあるの(笑) あれをB級ともジャンクとも言いたくないですけど、あのオリジナリティってすごいんですよ。

## アートのこと



### ナガオカケンメイ

デザイン活動家・D&DEPARTMENTディレクター。  
武蔵野美術大学客員教授。京都造形芸術大学教授。  
[www.nagaokakenmei.com](http://www.nagaokakenmei.com)



ファン・デ・ナゴヤ美術展は、1998年より開催されている名古屋市市民文化振興事業積立基金を活用した企画コンペで、前年度の秋に企画を募集し、次の年度の1月に展覧会が開催される。「TO BE CONTINUED」は今年度選ばれた2つの企画のうちの一つで、2014年に本学美術学部洋画2コースを卒業した大島歩、朝倉芽生、船戸彩子の三人が企画、制作したものである。

普段個人で活動している彼女達は、今回の企画においてアイデアイメージから制作までの殆どを、担当を分けず三人で出し合って進めたと言う。キーキーストは本人が見ても自分の文章には思えないらしく、その制作過程が展示空間をアノニマスなものにしているように感じた。

白い布で作られた通路は迷路のように螺旋を描き、鑑賞者は全容の見えない道を時には這うように進む。それはまるでRPGのようなのだが、そこにクリアすべきミッションがある訳ではない。同じタイミングで展示を観た年配夫婦が帰り際に漏らした「いったい、何を見たのかしら」という言葉が、とても印象的だった。私たちは何を見たのだろうか? その「何」を考える「こと」を、彼女達は見せたかったのかもしれない。通路で遭遇する映像や散らばったおもちゃの服に、不意に動き出すトランクケース。素通りの人もいるだろうし、何かしらの意味や懐かしさを感じる人もいるだろう。ただ、皆、出口へ向かって進む。

現実の世界でも、私たちは歩み続けなければならない。同じ場所に留まったとしても、それも一種の道であり、いつかそこを出た時はまた別の道を歩くのだろう。鑑賞者の様々な反応に課題点は出てきたと思うが、この世代ならではの人生や社会に対する感覚を、広い展示空間を存分に使い切って表現出来たのではないだろうか。

ところでこの通路にはバックヤードに出てしまう裏ルートがある。初めは気づかず2回目で遭遇できたその裏口から見た通路の外側は、何故か内側よりも仮想空間らしさを醸し出して不思議な景色だった。

彼女たちは今後このユニットを続ける予定は無く、一人は作家活動を続けるはず分からないと話していた。でも、この「通路」の「こと」をこれからも各々考え続けていくのだとしたら、もしかしらたらいつの日か再結成される時が来るのかもしれない。なんといってもタイトルが「TO BE CONTINUED」だ。いつかどこかで、偶然ばったりとこの通路の続きに出会えるといいな、と期待している。

※作家名は敬称略

惣城友美 アート&デザインセンター



撮影：城戸保

### ART WORDS FROM THE ART WORLD

## 芸術一話 第18話 <もう一人の自分>の大切さ



佐脇健一(Wing Gate)

美術評論家  
中村 英樹  
Hideki NAKAMURA

大分県出身の美術家・佐脇健一(1949年-)は、鉄の彫刻と巨大な写真を組み合わせたインスタレーションを制作している。欧米文化の影響が大きいといえ非欧米的な精神の深層に根ざす日本にあって、彼は、西欧近代の自己完結的な自我にも、日本の没我的な精神風土にも留まらず新しい自己の在り方を目指す。巨大なインスタレーションは、<もう一人の自分>によって二重化された新しい自己の在り方を示唆する。

例えば、荒涼たる砂漠の巨大な写真を背景にしながら、その前に盛られた砂の上に小型飛行機の折れた翼を門のような形にして立てた《Wing Gate》(2009年、ミクストメディア、819×819×270cm)では、見る人の視線が広大な砂丘と

折れた翼の間を行き来する。佐脇は、無限の時空とともに生きる日本古来の文化を引き継ぎながら、果てしない時間の流れを直視し、かけ離れた過去・現在・未来のイメージを突き合わせて、その<間>の<視線の切り替わり>、すなわち<意識の切り替わり>によって自己脇役的な<もう一人の自分>を呼び起こそうとする。

「自己脇役的」とは、自分が自分自身の脇役として自分を見つめ、自己中心的にならないことを指す。私たちは、<視線の切り替わり>自体、すなわち<意識の切り替わり>自体を体験することで<もう一人の自分>に目覚めて、自己脇役的であることによる平穩な生き方に心安らぎ、元気づけられるのかもしれない。